

菟田吾城(別名無)(指定無)(宇陀市大宇陀拾生 76 番地の 1)

(阿騎野・人麻呂公園)

田吾城(うだのあき)

阿騎野(あきの)・人麻呂公園は、大宇陀町のほぼ中央部、宇陀川支流の本後川と黒木川に挟まれた丘陵端部に位置している。ここから東方に高見山をはじめとした宇陀の連山、近くに古城山、北は万葉公園、西は西山岳、南は吉野の峰峰を望め、

「かぎろひ」は高見山方面に見る事ができる。持統6年(692年)冬の日、文武天皇となる前の軽皇子の伴でこの地を訪れた柿本人麻呂が「ひむがしの野にかぎろひの立つみえてかえりみすれば月かたぶきぬ」と名歌を残したゆかりの地である。現在公園には、昭和15年に立てられた万葉歌碑が立ち、その碑面に佐々木信綱の筆による人麻呂の歌が刻まれている。平成7年(1995)の発掘調査によって、この地が古代の狩り場(葉狩)であった「阿騎野」の重要施設であることが判明し、町では保存整備委員会を発足させた。そして、調査された「中之庄遺跡」の遺構を復元保存し、故中山正實画伯の壁画「阿騎野の朝」をもとにした柿本人麻呂石像を建立し、「阿騎野・人麻呂公園」として保存・整備している。公園内には掘立柱建物2棟、竪穴式住居1棟や、発掘跡等々が復元されている。また、毎年、大陰暦の11月17日には「かぎろいをみる会」が行われ、様々なイベントが催される。

2. 中之庄遺跡

中之庄遺跡は、大宇陀町市街地の西側に東西に延びる微高地上に立地する。これまで4次を超える調査が実施され、縄文時代早期から中世に至る複合遺跡であることが明らかとなっている。ことに、1995年に大宇陀町教育委員会によって行われた3次調査では、飛鳥時代の建物群等が検出され注目を集めた。確認された飛鳥時代の遺構には掘立柱建物11棟以上、竪穴住居跡3棟、堀、石敷溝、苑地状遺構などがある。掘立柱建物のうち最大のもの(SB01)は、桁行五間、梁間二間(桁行柱間寸法七尺一約2.1m、梁間柱間寸法十尺一約3m)の規模を持つ東西棟で、中心建物の一つと推定される。また石敷溝は、浅いU字形の溝底に1~3cm大の小石を敷き詰めている。現存値で、幅0.3~3m、長さ約20mを測る。苑地状遺構に向かって伸び、その先端は苑地状遺構の汀線と接し一体となる。この掘立柱建物を中心とした飛鳥時代の遺構群は、建物方位や重複関係によりいくつかの小期に分れる。その中の一時期には、SB01を中心に、その周囲に附属する建物群や庭園風の施設が配される構造を持つ、宮的な施設が存在した可能性が高い。その時期は出土土器から7世紀後半~末に位置づけられる。ところで、中之庄遺跡周辺は記紀、万葉集にみられる古代「阿騎野」の推定地であり、既述したように当該期には、壬申の乱関連の事項(672年)、天武天皇の行幸(680年)、軽皇子の遊獵(692年)等の記事に、「菟田吾城」(うだのあき)として登場する。調査によって検出された飛鳥時代の遺構群は、その内容及び経営年代よ文献記事事項との一致等から判断して、先の文献に「菟田吾城」として記される「阿騎野」の中心施設の一端である公算が高い。また、調査地周辺部の地籍図(明治23年測図)の調査から、調査地の南側に隣接する大宇陀町体育館敷地部分に東西約50m、南北約80mを測る長方形の区画割が存在する事が判明した。(図2網部分:省略)。この部分は周囲よりも一段高く、調査地付近の筆界がすべて自然地形に即した水田畦畔に沿う形で存在するのに対し非常に特異である。加えて、この区画割の筆界方位が、掘立柱建物SB01の方位と一致する事も注目される。地割りの形成そのものが飛鳥時代に遡るかどうかは現時点では不明である。しかし、大宇陀町体育館部分に掘立柱建物SB01と方位を同じくするような、一定の長方形区画が存在した可能性も指摘できよう。

前出の教育委員会の資料でも明らかなように、これらの遺構は官営の役所だった可能性大である。「阿騎野」は「葉狩り」の地として古くから知られていた事を考えると、草壁皇子や軽皇子もここに宿泊したか

もしれないのだ。今、私の立っているこの地に、天武天皇が寝たのかもしれないと思うと、感慨もまたひとしおである。稜々たる古今なるかな。

大宇陀町教育委員会による

672年6月、天智天皇の子「大友皇子」と天皇の実弟「大海人（おおあま）皇子」との間の皇位継承権をめぐる約1ヵ月に及ぶ内乱です。吉野宮の大海人皇子、草壁皇子、忍壁（おさかべ）皇子ら一行は、宇陀（菟田吾城（うだのあき）・甘羅村（かむらのむら）・菟田郡家（うだのこおりのみやけ））、伊賀、伊勢を経て美濃に入り東国を押さえ、別動隊は「飛鳥古京」を占拠、大友皇子の近江軍は苦戦しました。琵琶湖岸の戦いでも苦戦し、大友皇子の自殺によって、この乱は終息しました。大海人皇子は即位して天武天皇となり、以降、天皇を中心とする中央集権国家の基礎を建設しました。

その8年後の天武9年（680年）3月23日、天武天皇は菟田吾城に行幸しました。この行幸には、草壁皇子が同道していたことは、柿本人麻呂の万葉歌からも推測できます。この前年の天武8年（679年）5月5日には、天武天皇は、皇居、諸皇子を伴い、吉野宮へ行幸し、その結束を誓わせた有名な「吉野の盟（ちかい）」を行っています。最も有力な皇位継承者である草壁皇子に対し、自分たちの原点とも言える「壬申の乱」の日のことを思い起こさせ、決意を新たにさせる目的がこの菟田吾城への行幸に込められていたのではないのでしょうか。このように阿騎野は、吉野とともに天武天皇や鸕野讃良皇女（うののさららひめみこ、持統天皇）、草壁皇子と非常に関わりが深い場所であることがわかります。

壬申の乱の功臣のひとりである文祢麻呂（ふみのねまろ）は、慶雲4年（707年）に没し、火葬されました。この文祢麻呂の墳墓は宇陀市榛原八滝の山中に造られています。この地も壬申の乱の故地のひとつとなっています。

「うだ記紀・万葉」による



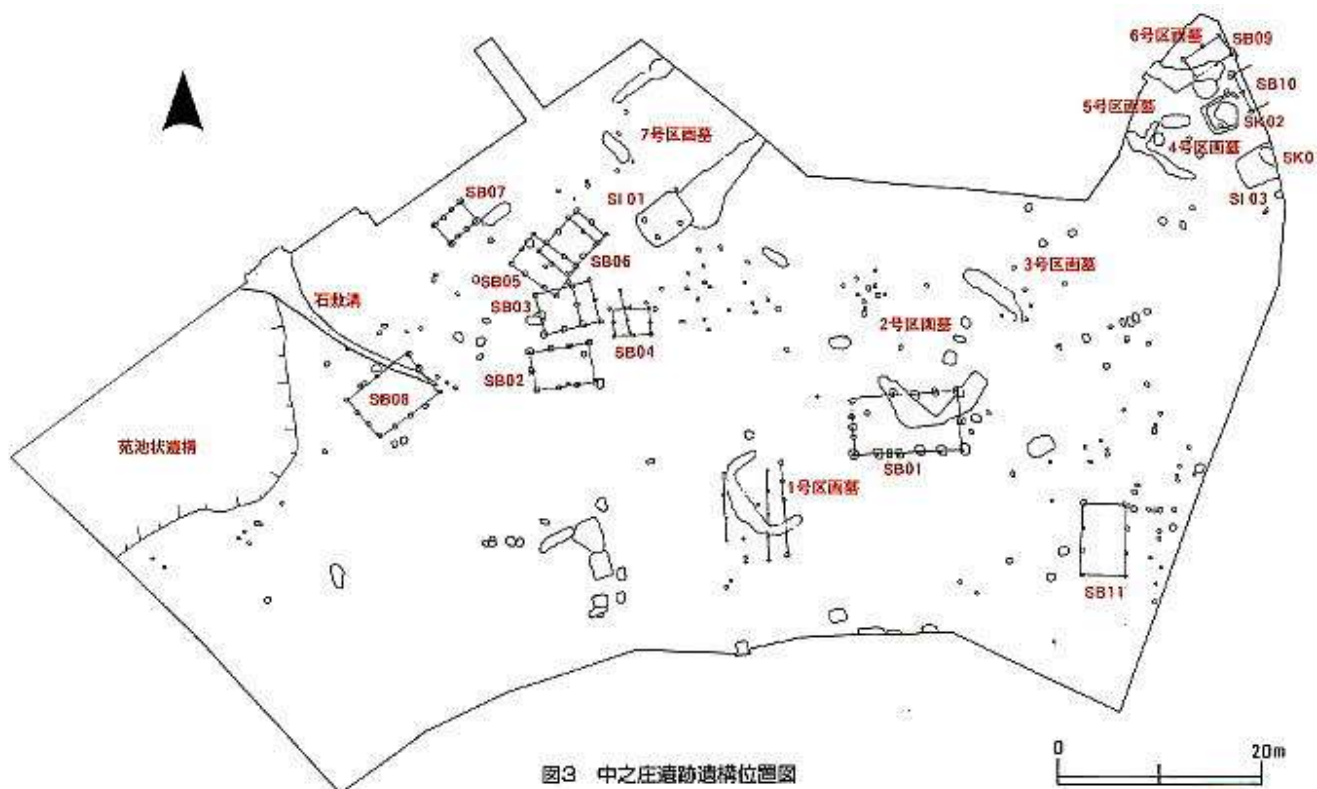


图3 中之庄遗址结构位置图